

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 姜 智恩

本論文「経学的観点から見る東アジアの四書注釈——17世紀朝鮮経学の新たな位置付けを中心に——」は、17世紀の朝鮮儒学における経書解釈を同時期の日本儒学と比較し、その特徴について考察を加えている。

朝鮮王朝（1392～1910）では国初から朱子学が体制教学となり、儒学者たちはこの枠の中で言説活動を展開していた。ただし、中には朱子学の所説に対して懐疑的・批判的な解釈をしたり不整合に見える箇所を指摘したりしたとされる者もあり、近百年間の思想史研究においては彼らを「反朱子学」の立場にあった者とみなして高い評価を与えてきた。本論文は、こうした見方が形成された経緯を再考する作業を通じてこれを相対化し、17世紀当時の文脈に沿って捉え直すことでこの見方とは異なる思想史像を提示しようと試みている。

論文は6つの章からなる。「1. 「朱子学批判」及び「独創性」・「実践性」という観点」では、従来の研究傾向を批判的に整理する。「2. 新たな観点の摸索—朝鮮経学の特徴に対する考察から」は、徳川日本との異同を述べることで問題点の所在を明らかにする。「3. 新しい注釈の誕生背景」では、17世紀の朝鮮儒者たちが朱熹の経書注釈を深く読み込むことを通じて朱子学の枠の中でそれを批判するようになる過程を分析する。「4. 経学において何を志向するか」は、彼らの経書解釈は個人的実践ではなく社会的実現を志向していたこと、そのため経書の理念を現実化する方法を模索していたことを論じる。「5. 経学の展開」では、趙翼・尹鑄・朴世堂という3人の朝鮮経学者と伊藤仁斎とを比較し、両者の経学の相違は朝鮮と徳川日本の儒学が社会的に異なる位置にあったことに由来すると述べる。「6. 経学方法論からみる17世紀経学の特徴」では、従来の思想史研究が経書注解を分析してきた方法は、それらが経学上の著述であるという本質を看過しており、経学的著述に即した分析手法をとることで朝鮮と日本の儒学の相違が説明できると論じる。

以上、本論文は従来の朝鮮儒学研究を方法的に批判し、当事者の執筆意図である経学に即してその著述を分析する必要性を強調する。この斬新な問題提起は、今後議論を呼ぶことが予想される重要なものである。ただ、論文構成上、叙述においてやや反覆が目につく形になっている。また、題目で「東アジア」といいながら中国の経学に対する扱いが軽いため、叙述の説得力がいささか不十分である点が指摘できる。

とはいえ、朝鮮儒学を経学という本質的性格に即して捉え直すことを主張する著者の論述は、当該分野の研究に対して大きな意義を持つものである。よって、審査委員会は博士（文学）の学位を授与するにふさわしいと判断する。